

## INTERVIEW：インタビュー

東京スポーツ新聞社  
代表取締役社長兼編集局長

# 酒井 修さん

今回のインタビューは、独特の見出しや編集で弁護士にもファンが多い東京スポーツ新聞（通称「東スポ」）を発行している東京スポーツ新聞社の代表取締役社長兼編集局長である酒井修さんです。酒井さんは大学卒業後に東スポに入社して記者となり、現在でも代表取締役のほかに編集局長を兼任され、いわば東スポの紙面作成に常に携わってきた方なので、新人記者時代のエピソード、伝説となった有名記事の裏側など色々面白いお話をうかがうことができました。

（聞き手・構成：彦坂浩一、伊井和彦、臼井一廣、志賀 晃）



### 入社の経緯

— 出身大学、学部はどちらだったのですか。

早稲田大学の第一文学部です。在学中は早稲田大学ジャイアンツファンクラブに入っていました。ジャイアンツファンクラブでは、夜は後樂園球場に行き巨人を応援したり、週末は他大学と軟式野球リーグの試合をしたりと、色々していました。

— 野球のポジションは？

サードとピッチャーでした。

— 野球が好きだったということから、記者を目指されたのですか。

新聞というか、スポーツ新聞とかそういう方面で働きたいなとは思っていました。そこで、あるスポーツ新聞社のOB訪問に行ったのですが、そこで「東スポは面白いよ」と言われてきてね。そのころ、東スポは読んでいましたが、「いつも巨人の悪口ばかり書いて、何だ、この新聞は？」と思っていました（笑）。

その後、東スポの入社試験を受けたのですが、そのとき、ジャイアンツの表記をこれから「巨人」から「読売」にする動きがあるという記事に見出しを付けろという

問題が出て、それに「巨人消滅！」という見出しを付けた記憶があります。

— それで採用担当が「こいつは面白い」と（笑）。

いやいや、そうでもないでしょう。あんなもんは運ですよ、運。

もともとちょっと人をビックリさせたいな、という性格だったんです。そこがちょうど東スポに合ったのだと思います。それで東スポから合格の連絡がきたのですが、当時、卒業が危なかったのも、そこから慌てて猛スパートをかけました（笑）。

— 東スポ入社後は、ジャイアンツファンでありながら、泣く泣くアンチジャイアンツ的な記事を書いていたのですか。

いや、そんな。ファンはファンですけど、この仕事に入ってから、まず売れることを考えますからね。巨人担当にはなりませんでした。

— 東スポに入社してすぐに野球を担当されたのですか。

入社当時「野球を担当したい」と言っていたら、「大阪にはプロ野球球団が4つ（当時は阪神、南海、阪急、近鉄）あるから勉強になる」と言われて大阪支社で働

くことになりました。大阪に着いたら、「明日、阪神や」と言われ、てっきり阪神タイガースの取材かと思ったら、阪神競馬場つまり競馬担当だったんです（笑）。その後、本当にタイガースの担当になりましたけどね。

## 「東スポ」とは何か

— 現在、従業員というか、スタッフさんはどのくらいいらっしゃるんですか。

そんなに多くないですよ。400人もいないのではないかな。

— 記事は皆、東スポの従業員の記者が書いていらっしゃるのですか。

原稿、コラムとかは外部の方に書いていただくことはありますけど、基本は自前で賄っています。

— 「東スポって何ですか？」と言われたとき、どのように答えられますか。

娯楽紙ですね。総合娯楽紙。

— 総合エンターテインメントですか。

そうですね。読者の方も色々な使い途があるのではないですか。競馬を主体に買っていただく方もいらっしゃいますし、東スポ独自の記事の切り口を楽しみにして下さる方もいらっしゃる。

— イメージしている読者層というものがありますか。

想定イメージは、やっぱり大人ですよ。

大人といえば、昔、某有名UFOプロデューサーの「宇宙人の死体発見」という内容のテレビ特番取材して記事にしたら、某大手新聞の社会部の人から「こんなものを子どもが信じたらどうするんだ！」と抗議に来たということがあったのです。そのとき、私が「子どもは東スポをあんまり読みませんから」と言っちゃったら、余計怒ってしまったということがありました（笑）。

— 東スポといえば、大きな事件が起きて他紙がすべてそれを1面にもってきても、東スポの1面は違ったという伝説をよく聞きますが…。

よっぽどの大事件があったときは、全紙が同じになりますよ。例えば、スポーツで松井秀喜選手が引退したときは全紙同じだったでしょう。これは1面を外せないという場合は1面にしますね。ただ、もし同じネタになってしまったとしても、切り口は他紙とは違うと思いますよ。

## 「東スポ」の紙面ができるまで

— 東スポの紙面が確定するのはだいたい何時頃になるのでしょうか。

週末は競馬の枠順が出てこないと内容が決まらないのでちょっと遅めになりますね。月曜日から木曜日は早い時間に決まりますよ。私が5時くらいに会社に来て…。

— え、朝の5時ですか？

はい。朝の5時に出社して、全部の原稿を読みます。例えば1面なんかは、候補を見て、「このまま行こう」とか「これはダメだ」と決めたり、朝にニュースが飛び込んでくれば急遽それを1面にしたりします。

— 紙面作成において何を「決め」に持ってくるかというのは、夕刊紙としての東スポとして何を持ってくれば一番売れるのかということをお考えになるわけですか。

自分の感覚が間違っていたらしょうがないんですけど、まず自分が一番面白いと思うかが優先ですね。

— みんなが読みたい、買いたくなるような記事を持つてくるということですか。

そうですね。でも、それはどの社も同じじゃないですかね。ただ、明らかに「1面はこういう政治ネタ」と決まっている夕刊紙もあるでしょう。うちはそういう縛りがないので、いいんですよ、競馬でも、ゆるキャラでも、野球でもいいんですよ。



読んだ後ちょっと楽しくなったり、  
読んで得した気分になったり、そう  
のようなメディアでありたいな、  
と思っているんですけどね。

酒井 修

——見出しの付け方についてはどうですか。東スポといえ  
ば、昔、1面の衝撃的な見出しがよく話題になっていました。

いや、見出しはそんなに言うほど、もう衝撃的でも  
なくなったんじゃないですか。(文字サイズでは)むしろ  
スポーツ紙の方がドカンドカンとやっているんじゃない  
かなあ。今では、他のスポーツ紙の見出しよりも  
うちの方がすっきりしている気がします。

### 人面魚, ネットシー, アメリカの某有名歌手が痔だった, の裏話

——東スポといえば、他にも、一時期「人面魚ネタ」で  
有名になりましたよね。

私は人面魚とかじゃなくて、だいたいオカルト系、  
UFOの記事を書いていました。あのころ、UFO、宇  
宙人のネタが多かったんです。

ただ、人面魚は、私もアメリカで見たことがありま  
すよ。映画の取材でロサンゼルス映画監督の家に行  
ったらその監督がすごい日本通で、池の魚が全部ニシ  
キゴイとかそういうものばかりだったんですよ。それ  
で池を見ていたら、中に人面魚がいました(笑)。

——それは記事にしたのですか。

記事にした記憶はありますけど(笑)。

——「ネットシー出産」という1面トップ記事もありましたが。  
指宿のイッシーなら取材に行ったことがあります(笑)。

——アメリカの某有名歌手が痔だった、という1面トップ  
記事にも驚かされましたが、どうしてあのような記事が出  
たんでしょうか。

私もその類の海外ネタ担当でしたが、「痔だった」と  
いう見出しがついたのは、当時の海外のゴシップ紙に  
「芸能人のごみ箱をあさる」という今だったらとても信  
じられないコーナーがあり、そこにごみ箱から座薬が出  
てきたとあったからです。ただそれだけです(笑)。

### 東スポの目指すもの

——今、東スポが民事訴訟で訴えられるというケースは  
どれくらいありますか。

今は、昔よりも多いです、訴えてくる人が。ただ、  
だからといって訴訟を恐れて萎縮するようでは困りま  
すけど。

——昔、東スポなど数社が被告となった名誉毀損訴訟で、  
東スポの記事を誰も信用していないから名誉毀損は成立  
しないという判決が第1審で出て、第2審でひっくり返っ  
たという話がありました。

当時のうちの会社の編集のトップが裁判所でそんなことを言っちゃって、控訴審の裁判官に怒られたという話ですね。

ただ、今はそういう想定では紙面を作っていないです。大上段に構えるつもりはありませんが、誰も信じてくれないような新聞を出してもしょうがないですから。記者には「訴えられても十分に反論できるような記事を書きなさい」と言っています。

——インターネットの発展が与える影響について、何かお考えになっていることはありますか。法律問題でも、今ではもう、検索すると、ちょっとした法律の知識は出てくるような状態です。今後、自動翻訳サイトのように自動法律相談サイトが出てきたりして、弁護士に相談する人が少なくなるのではないかと危惧する向きもあります。

ありますよね、弁護士が全部ネットで回答するサイトが。でも、ネットは、やっぱり限度があります。間違いも多いですからね。ネット上の情報は基本的に無料ですが、私たちは有料でやっている以上、それなりのものを作らないといけないということです。

今は「痔だった」って書いても、昔とはちょっとニーズが違うのではないかと思います。今は、海外の雑誌、ゴシップ紙なんかでもネットの方が早く出ますね。

この前、ハリウッドのセレブの写真が流出してそれをどこかの雑誌が掲載しようとして結局回収したと報じられた事件がありました。あれだって雑誌に載る前にみんなインターネットで見ちゃっていますもんね。

140円で皆さんに買っていただくわけですから、全部ネットで出ているものを書いてもしょうがないです。

——東スポのライバル紙として想定しているところがありますか。

ライバルは、新聞だけではありません。例えば、今これだけの色々な情報伝達手段が発達しちゃうと、時にはテレビであったり、インターネットであったり、雑誌であったり。スポーツ紙も、夕刊と朝刊の違いはありますが、ライバルはライバルです。ただ、これはどの社もみんな同じじゃないですか。

——東スポはいわゆる夕刊紙ですけども、他の朝刊紙とかと比べて夕刊紙としての特徴を出そうと考えていらっしゃるのですか。

夕刊紙というか、東スポは仕事が終わってから読む人の方が多いですから、「ちょっとホッとするような話題」の方がいいときが多いと思います。笑っちゃうような話とか。夜、飲み屋で「東スポにこんなのが載っていたよ」と話題にしてくれるような、そういうことは考えています。

——東スポを取り上げた本にも、東スポが黎明期の頃に当時の社長が「うちの新聞は仕事が終わって疲れたサラリーマンが読む新聞だから、そんな難しいことを書いてもしょうがないんだ。みんながホッとする何か楽しみになるようなことをつくるんだ」と言っていた、と書いてあります。

その辺は、変わってないと思います。何か凶悪事件が起きた、巨大地震がすぐ来るぞとか、そんな記事ばかり読んでいたら滅入っちゃいます。だから、読んだ後、ちょっと楽しくなったり、読んで得した気分になったり、そういうようなメディアでありたいな、と思っています。

## 後記

東スポと言えば、自分たちのポリシーを崩さず、他紙とは同じことを書かない、時に衝撃(笑撃?)的な特ダネを提供するアナーキー的な夕刊紙というイメージがあり、そうであればこそ弁護士の間でもファンは多い。しかし、今回のインタビューで分かったことは、「エンターテインメントに徹し、夕方の仕事で疲れた読者に少しでも楽しんでもらおう」というプロに徹した集団、それが東スポであるということであった。「これはこうでなければならない」などと決めつけたりせず、自由なスタンスでネタを探し、自分たちも面白がって社会に娯楽を提供する、その姿勢はマスコミとして潔い。これからも大いに楽しませて欲しい。(伊井)

### プロフィール さかい・おさむ

1963年生。埼玉県出身、早稲田大学卒。1986年に東京スポーツ新聞社に入社。レース部、文化部、運動部の記者、部長職などを経て、2009年に編集局長、2012年代表取締役社長兼編集局長に就任し、現在に至る。